

反コペルニクスの転回のために

渡辺 恒夫(Tsuneo Watanabe)

東邦大学理学部生命圏環境科学科

超心理学が科学として受け入れられるか否かは、実験室的証拠の有無は二の次で、

- (1) 臨床試験に合格すること。
- (2) 既存の科学と体系的整合性があること。

のどちらかが必要と思われる。臨床試験とは、なんらかの実用化目的を以って、実用化の受益対象者を対象とした試験という意味である。漢方薬や向精神薬のあるものは、なぜ効くのか原理がよく分からないという意味で、既存の科学と体系的整合性があるとは言えない。にもかかわらず保険の点数になるのは、上記の意味での臨床試験に合格するからである。したがって、超心理学が市民権を得るためには、(2)の条件を充たせない場合、実用に役に立つことを証明する必要があるのではないか。そもそも、近代科学の威信の源泉は、内に実践的解釈学を秘め、技術と一体化して工学化するところにあるからだ。

さて、この2つの要件に関しては現代ではますます厳しさが増しており、精神分析も疑似科学の辺土へと放逐されつつある。チャーチランドの言うように心理学そのものが自然科学と折り合いが悪いので、このままでは、生き残るのは進化心理学や神経心理学を含むバイオサイコロジー系と、科学というより職業技術である、教育心理学や産業心理学といった応用領域だけになってしまうだろう。超心理学はどうかというと、物理学との(厳密に言えばその唯物論的解釈との)体系的整合性の問題がネックになっていると思われる。問題解決が難しければ、いっそ物理学を唯心論的に再解釈して、科学主流とは別の世界観を構築する方がよいのではないだろうか。

東洋医学(統合医療)のように伝統的常識に属する場合は、科学知の体系と整合性がなくとも、比較的受け入れやすい。同じ現象でも気功と名づければ超心理より受け入れ易いのもその一例である。伝統的常識の中には、「運・不運」「宿命」「自由意志」のように、科学知の体系中には占めるべき場がないにもかかわらず、科学主義者であっても日常的に使っている概念、それなしては社会が成り立たないような概念が多くある。超心理学の母体も元々伝統的常識にあったにもかかわらず、科学知の仲間入りをしようとしたため、とたんに基準を厳しくされて抵抗にあっているのだろう。この抵抗は言うまでもなく非合理的なものであり、科学者の暗黙の行動規範である「進歩は無条件に善なり」に根があると感じられる。超心理学の研究分野が、予知やテレパシーなど科学革命が背後に投げ捨ててきた前近代の知にあるからである(その点は精神分析も同じである。フロイトが、自分の夢解釈の方法は古代の夢判断の復活であると、公言していることを想起せよ。)従って、(心理学者を含む)主流の科学者にベムの実験の追試をやれと言っても、無理な話である。そもそも激烈な競争の渦中にある主流科学者にはその暇がない。

これに対して、トランスパーソナル系は伝統的的日常知との統合を目指すことで、言わば真っ向勝負を避けているだけ、主流科学との軋轢も少ないと思われる。ただし、トランスパーソナル系の論客、ヒルマンやミンデルなどユング派の営む素人っぽい形而上学は、科学哲学的批判には耐ええない。唯心論的に再解釈された物理学（中込照明著『唯心論物理学の誕生』海鳴社、1998）の上に構築されるべき人間科学の厳密な方法論は、フッサールの超越論的現象学を基礎としなければならない。私はそのような試みを、本大会でも夢について行っている（『夢科学の哲学2：夢の現象学』）。今、ここにいる私が経験しているこの世界こそが科学の出発点とすべき実在であって、脳の生み出したクオリアなどではないことに納得が行けば、世界観は変わるだろう。そのような「反コペルニクスの転回」をへて初めて、超心理学の研究領域もまたその生み出すデータも、意味を持つのだと思われる。